

令和3年度 自己点検・評価

学内からの視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
プログラムの履修・修得状況	<p>本プログラムでは、申請科目の「情報処理」(2単位)、「教養数学」(2単位)とも本プログラムの必修科目とし、両科目の単位取得をもって、本プログラムの修得を認定することとしている。なお、教育課程上は「情報処理」を必修科目、「教養数学」を選択科目として位置付けている。令和3年度は、両科目を履修した者は122名であり、履修率は5%であった。学科によって履修率に差はあるものの、全学科の学生が履修している状況となっている。今後、様式4の④から⑧までの各種取組の実施を通じて履修・修得状況の拡大を図るとともに、スポーツ健康科学という本学の専攻領域に係る教育において、数理・データサイエンスの観点に立った関係科目の修得に係る教育体系を併せて検討構築していくことにより、本プログラムの履修・習得の実効性を高めていきたい。</p>
学修成果	<p>令和3年度は、「情報処理」(2単位)について、授業初期でCBT方式の試験を行い、授業期間の後半で再度同範囲の試験を行い、学生の理解度を検証している。また、その際、受講する全学生の習熟度が同レベルとなることを達成目標としている。令和4年度からは、「教養数学」その他、本プログラムの関係全科目を対象とする学修成果を全体的に評価できる視点・尺度を構築し、プログラム自体の学習成果を確認していきたい。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>本学では全科目で授業アンケートを実施し、教育改善企画運営委員会が取りまとめている。アンケート結果は、担当教員にも個別にフィードバックされ、同委員会が準備している評価シートにて各々が分析を実施し、自己点検評価等で報告をしている。授業アンケートの項目には授業内容の理解度に関する設問もあり、その結果を見ると概ね理解できていると捉えている。令和4年度は、対象科目全体を通じた本プログラム全体の理解度の確認体制を構築していきたい。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>授業評価アンケートに、総合的に判断すると良い授業であったか否かを問う設問があり、その結果を見ると、個別科目単位では、概ね良い授業と判断されていると捉えている。この授業評価の結果は、掲示板等で学生にも示しているため、学生間でも</p>

		<p>推奨されている科目の部類に入っていると捉えている。また、当プログラムの修得認定証の付与を検討している他、表彰式等を実施することなどにより、学生間の周知がさらに図られる方策を検討している。</p>
	<p>全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<p>令和3年度は、本プログラム全体としての教育という視点での履修者数・履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況を確認するところまでは至っていなかった。令和4年度から本プログラム関係科目について、2科目増設するとともに、一部学科でしか開講していなかった関係科目を全学科開講するなどの対応を図ることにより、学生に対しては、プログラム対象科目の個々の位置づけのみならず、プログラムにおける科目相互の位置づけを理解させる等により、これからの Society5.0 時代などで必須となる本プログラムの重要性を丁寧に説明することとしており、4年後には履修者数が3割以上となることを目標に取り組む。</p>
<p>学外からの視点</p>		
	<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>本プログラムは令和3年度から開始したこともあり、本プログラム修了の卒業者は未だ現出していない。ただし、本プログラムの点検・評価の観点から、毎年実施している「卒業生アンケート」および「企業等へのアンケート」の調査項目の中に、令和4年度から本プログラムに関する設問項目を盛り込むこととしている。</p> <p>本学はスポーツ・健康科学を専攻領域とする大学であり、競技力向上もさることながらスポーツや健康を多方面から「支える」人材の育成にも力を注力している。例えばスポーツを「支える」ということには、選手のケガの予防や復帰、筋力や体力の向上、栄養面など様々な観点があり、これら機能の発揮には、数値測定などのデータや統計処理など、数理・データサイエンスの学修は必須となっており、本プログラム設置以前から、当該素養を備えた人材の育成、実社会での活躍、企業等の評価は、ある程度獲得してきている。今後は、本プログラムの履修・修得による数理・データサイエンス思考を十分踏まえたスポーツ・健康科学の学修ということについて、スポーツ・健康産業のみならず、行政や教育分野の採用側から十分な理解を得ることを通じ、企業等の評価の向上等につなげていくこととしたい。</p>

	<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本学では近隣の5つの自治体および7つの企業等で構成するコンソーシアムを組織しており、スポーツや健康に関する現場で、本学の教育プログラムについての意見聴取は行っている。実社会側における数理・データサイエンス思考を十分踏まえたスポーツ・健康科学の学修ということについての理解は、未だ十分とは言えない。本プログラムの内容・手法について、Society5.0を踏まえた設問などを充実させることにより、効果的に意見を聴取し、本プログラムへの還元を深化させていきたい。</p>
	<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>スポーツ・健康科学を専攻領域とする大学であることから、実際の身体活動を得意とする学生も多く、動画や画像などの視覚資料の充実には取り組んできており、また、競技大会等で授業を欠席した学生をフォローするため、授業資料をGoogle Classroomにアップロードし学生がいつでも視聴できる対応を図り、さらにチャット機能を用いるなど、学生同士で質問しあったりできる主体的な学修環境も整えている。今後は、さらに数理・データサイエンス・AIを学ぶ楽しさを理解させるために、新たな風潮を示す具体的事例（Vtuber, Vocaloidなど）を頻繁に取り入れる等、若者文化やサブカルチャーとの関わりも踏まえながら授業の展開を図ったり、数理・データサイエンス・AIを学ぶことの意義を理解させるため、専攻領域での学修と数理・データサイエンス・AIとの関わりについてより関連事例を実践させること等により、理解促進を図ることとしている。</p>
	<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>数理・データサイエンス・AI教育プログラムを主体的に運営する「ICT教育推進委員会」と授業やカリキュラムを管理する「教育企画部」との連携を図り、学生による授業評価アンケートの結果を参考にして、本プログラムの内容および水準についてPDCA(PDSA)サイクルを実施する。</p> <p>また、スポーツ・健康科学を専攻領域とする大学として、数理・データサイエンスの授業では、競技力向上やスポーツを支える機能その他、学生が興味関心を持つ内容と結び付けた事例をより多く取り上げ、数理・データサイエンス教育の内容・水準の向上を図るとともに、応用基礎レベルの認定プログラム申請も見据え、各学科の人材育成領域に即した専門科目の教育内容の改善を検討することにより、分かりやすい授業構築を図っていくこととしている。</p>

